

琉球の方言 1巻 : 八重山石垣島川平方言

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

102

(発行年 / Year)

1975-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012852>

818
17
1

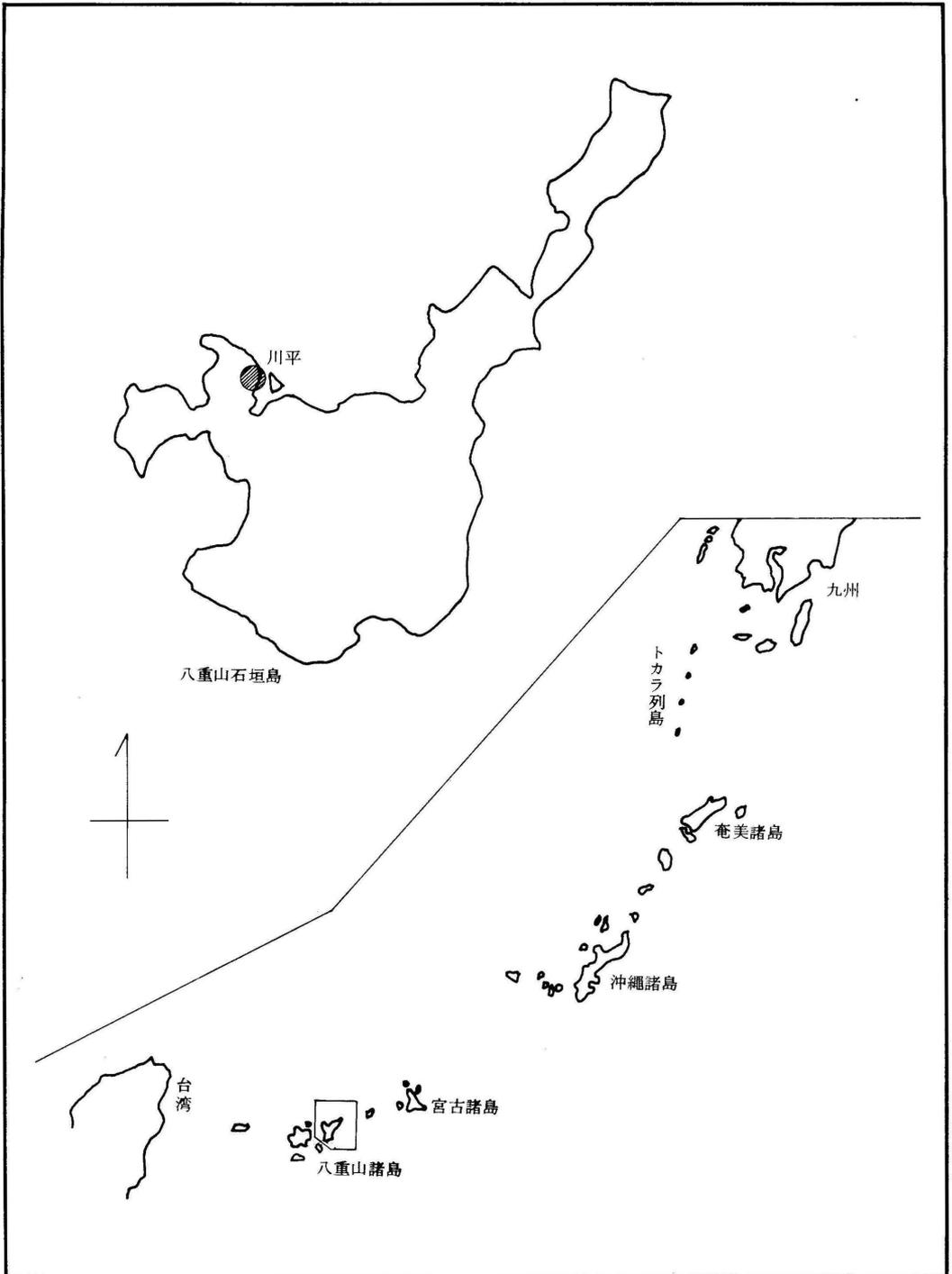
琉 球 の 方 言

八重山石垣島川平方言

1 9 7 5 年

法政大学沖縄文化研究所

八重山石垣島川平の地点図



はじめに

琉球方言は日本語の中にあつて本土方言とは異なる諸特徴をもっている言語である。その特異性を生み出した要因として島嶼という地理的条件をあげることができる。すなわち南海の島嶼には本土の時代ごとの言語変動の影響がそのまま伝播して行かなかつたために、本土における歴史的言語変化の波からはずれてしまつたのである。たとえば、本土では文献以前に消失したハ行P音や、室町末期に起つた活用語の連体形と終止形の大変動や、係結法の消失など、これらは歴史的言語変化の現象としてあげることができるが、琉球方言では本土のような歴史的言語変化の波をかぶらずに、これら古形を未だとどめ、さらに多くの古語などをもよく保存してその特異性をあらわしているのである。

いま一つは、島嶼という条件によつて、個別の言語変化が深化していつたために、その特異性をさらに深めていつていることである。琉球方言は奄美・沖繩・宮古・八重山・与那国の諸方言にわかれるが、これらはさらに小方言に分化し、島ごと、集落ごとの方言にまで細分されることになる。これは、あたかも日本語の変化の可能な限りの方向性を示しているかのようでもある。このような小方言を生む琉球方言の諸変化によつて、本土方言では観察できない多くの言語現象が観察できるのである。

このようにして、日本語の一分枝として存在する琉球方言は、いま、試練の時機に直面している。すなわち、交通機関の発達によつて島嶼という条件は克服されつつあり、またマスコミの発達によつて琉球方言の特異性も失なわれつつある。これは、工業化・情報化社会における必然的な趨勢とはいへ、大いなる文化遺産の消失を意味するものであり、文化史的に貴重な資

料が失なわれることになる。

このような状況にあつて、法政大学沖繩文化研究所では、琉球方言の実態をできるだけ広範囲にわたつて収集し、少しでも多くの言語資料を後世に残していくことを責務の一つと考えるものである。

琉球方言の資料を収集するにあつて、次のような計画をたてた。

(1) 奄美諸島から与那国島にわたる琉球全域の言語実態を、地理的にも、言語的にも、できるだけ広範囲に記述する。

(2) 調査は年に一地点に限定し、その地点の言語現象をできるだけ多く記述し、年々その成果を積み重ねていき、ある時期にこれらを集大成する。

(3) 調査は臨地してその方言を簡略音声記号で収集し、できるだけ分析しない生の資料を得るようにする。

(4) 調査は外間守善・屋比久浩・中本正智・内間直仁・加治工真市・野原三義の所員が担当する。

(5) 一年ごとの調査結果をまとめる。

昭和49年の調査対象地点は、八重山のうち言語的に重要なもので、しかも、言語調査のおくれている石垣島川平とした。

石垣島川平は人口400名ほどの農業を主産業とする集落である。石垣島の中心地である^シ四箇(石垣)からバスで40分ほどのところである。川平湾を擁する風光のよいところで、最近では全国から海水浴の客が多い。したがつて、ホテルなどの施設もできている。

川平の調査は昭和49年8月6日から同15日まで実施した。

調査にあつて、話者は次の方々である。

南風野英助氏（82歳）
大仲 松氏（81歳）
南風野英三氏（79歳）
崎山 用次氏（75歳）
喜舎場兼美氏（76歳）
崎山 恵氏（72歳）
喜舎場兼次郎氏（70歳）
高屋 英信氏（67歳）
前浜 永光氏（52歳）

とくに、前浜永光区長には、話者の紹介、その他で、お世話をいただいた。その他、川平の多くの方々にいろいろなことを教えていただいた。ここに記して、厚く御礼を申し上げます。

今回のまとめは、自然談話と語彙は中本正智文法のうち動詞・形容詞・助動詞・代名詞などは内間直仁、助詞は野原三義がそれぞれ担当した。

法政大学沖縄文化研究所

言語班代表 外間守善